



13
3416
103

十九編 西遊記 卷之五十一

五十一

秋鹿 勝菴院

南總里見八犬傳第九集卷之五十一

東都

曲亭主人編次

第百八十四回下

義成功臣を重賞して八女を妻とし、
信隆、舊城へ還任して罪過を免る

再説義成主の八犬士四家老、
從ふて參向する真利谷の老母が我近習の就て請ふ旨あり其所以の柳丸

一個の女兒の葛羅媛と喚做して今茲の十六歳の做りぬ是が爲の智媛を

徴れどもいまだ相應した所縁の願ふ安房上總の諸城主の子息達を

擇せのひて這智媛と御媒妁の幸甚しからんとり真利谷我外戚
なれば他等が情願由らぬも我も亦憶ふ愛の思ふもそれよりも猶ほ
汝等も知る如く我の八個の女兒の開が中め妾腹も多かれど其母或の産後の

身故り或の短命ありけしむ皆吾孀が養ひめて年迄ありけり有侍れが孰も
嫡腹の異るるを我も亦他等が為のなをく婿と擇む一女のいふ所縁きたり
及て他等が幸あるか我今八個の女兒をとり八大士等が妻せましく欲きいひても
大士の賢才其忠其功八人ながら我女婿の做さぬ足まじり父台這意をいふか
亦他事もなく仰され八大士等へ阿とむるの志難し開が程の辰相と清澄の
俱の答稟まや御意美りなりぬ八大士の伏姫上の御子たるべし宿因あり然
賢慮の至所誰の字と稟まき臣等も其美と豫より願しくそのひけれと
いふ道節推禁めて御家老開の憚りながら臣等が思ふよりいふ所抑臣等
義兄弟八名の當家の宿因あり只一戦の微功をとり各城主あるされま
ま胸安うらむ所の所然るを況姫君達をとり妻と下しめわが盈て溢る
真加の盡んまの美の獨忠與が賢達を辨ひ稟まふゆゑ都一心異體ある義

兄弟等も同意の事と諷して左右を見くまじり成孝胤智自餘の大士も然之
然と點頭て大山説ひて定は好侍の畏けまじり目今館の御威徳も姫上
達と近國の大諸侯の妻せぬとも皆欽びて是を容まん何ぞ家臣の渾家の
做さんや且臣等八名の伏姫神の故をとりて夙く知らぬはつりくも仕ある所
新参の勤勞人より上大夫の席の置まて采地一萬實の城主する
最過分き君恩めて人の媚嫉も影護り然と又御配偶の實は是物体
約莫人の臣として富貴其君を推と絶へ亡ざる者ありと稀に伏請御家老達
臣等が為の御配偶の御沙汰を稟し止らぬ猶この上の幸あるんゆゑと諄
返も甲一々一々送の語を續言を續て口中より出るが如く連り推辭て己
まじり義成主推禁めて然るゆゑ大氏の每非如連城の大諸侯ありとも賢
憑ごとく富貴を負ひ我欲せざる所然に忠臣の位貴く任重くして兵權

嘗めありといふ人どもいよく忠誠ありて其君を後みするところ蜀漢の諸葛
武侯我國南朝の北畠准后の如き是之矧又我八犬の賢臣をばていませ
嫁さる八個の女兒あり竟み大氏の妻さるる抑又天縁ありとて我意既
決せしむる辭ひそと面正しくと論るふ君命脱る路もなだ大士等あはるく
稍言美を稟さぬ辰相清澄も欽ひて直元貞住共侶の祝と千歳とぞ
唱へけり當下義成又宜ふやう柯と伐者い必介とてと妻と娶る者い必媒と
もて周人の詩の詠まると所載て三百篇の中み在り今我六郎兵庫助とて這
督嫺の媒妁みせん武者助難魚太郎の俱みこの美を相副て有司の所要を
課まじ但一我八個の女兒の年少少のりといふも大士の年相似とて大坂
大江只是の自餘の六犬士の年少りといふ然今孰とて孰の妻せんとの美
分別まへりごと誠や和漢古俗の常言の約莫男女の正配に其神ありて是を

嘗る我國俗の道く年の十月毎に諸神出雲の大社の聚會ありて世間の男
女の爲に正配とて一ものり又唐人の所は是は似たり或は月下の一個の
翁の書冊を開き是を見世間良賤男女の姓名と其年歳と識る者
ありて是れ赤繩とて男女の脚を繋ぐとて非如讎言敵とてとも夫
婦み做らざることをいふ或は氷下の兩個の翁の相對て相譚も氷上の人
是を空に世に在る所の男女の正配のひきつらとていふと媒妁兒を月老と云
又氷人といふ又唐山の妓院を祭る神を白眉神といふ國俗の外云かよふ神の
似て月老氷人と同く開くを左も右もわれ我女兒等の正配に他等も各二
條の繩を合せ大士等も是を牽せん其繩の本は一條とて各名簿を締着
誰繩をもて知らしむべし大士等各其牽所の繩よりして甲乙丙丁と妻するを
知るといふも天縁といふべし縦些の過不及ありとも誰の訴誰を怨ん這美

什麼と詳らる。示談の辰相清澄等の直元貞住共侶の只音の感して己まを
 八大士等も今さうの異議をもつものさうに其計の精妙を稱て兼服を
 道吉日先赤繩を行ひてん女子の夜を宜とまの故の誓姻の字の女は従
 昏の従へり大士等の點燭時候より俱の朝服を整へて六郎兵庫助等を安内
 免出居の方まを参るべし既我女児等ありのころをさへくべ準備を
 桃の天々くる來春二月下旬の做まべし大士の地のりて城を修造する
 金三千兩を速く起して城郭修造といふるべし來春誓姻の折ま
 家作の大槩改成とて藤家のをさへりてと言叮寧示し大士等齊一
 額を衝て君恩還る所を拜し奉るべし其款を稟けり姑且して

親兵衛の辰相清澄の向ひて言卒介のいへども禮の男子の三十のりて室
 の後世の和漢是の拘らる十七八より娶る者のいへども臣等の年尚十五の
 足らざる論ゆくと男女の誓姻を定ると唐山の結髪の大妻との
 國俗の所云のいへり是なりと成長及びて誓姻を執行する者及は是なり
 いま十六歳未満の誓姻を做し男子あるをせむと臣等も亦是のりて
 結髪の大妻兼まらる誓姻合色の大禮の御猶豫とを願しけれと推辭を我成
 主うち安て親兵衛開の理りの似れども我思ふよりはちるを汝の生年
 二五のりて身の長の十七八の少年の異さるる脅力の萬夫の敵まへく心
 術の白頭も宿儒も及する所あり何ぞ只年を數て誓姻を遅礙せんや且明
 春の誓姻の汝一人を漏らば汝の妻とらん者必や怨むべし娶りて後十七歳
 まも閨房を俱めざるとも又俱めざるとも開の我知る所あり只常人の上を

して年を論と云々と推辭の要きたるのふとと理通て論の辰相清澄膝と
 我と御説定ぬ其理の親兵衛が奇せたるも其美の思ひ足らざる一八年の
 泥と故の事と執合され七六士も大田豊後を首と仁の代りて救命の
 飲びを稟さる親兵衛今の己を以て四家老を向ひて卒介の異を
 謝しあける信而八六士四家老の今宵の一を以て身暇を賜りて退りて准
 備をせし程の秋の日早く暮初て點燭時候の作りく大塚信濃大川莊介
 大山道節大飼現八兵衛大田豊後大村大学大阪下野大江親兵衛俱光
 絹衣長社初て東辰相流川清澄引きつ後堂と前亭の間山雞の同候
 を序次程よく羅列れる左右の銀燭のつとなく建列ねて白晝の如く明かり
 夜の櫻の杪の似る大士の骨相同くねど孰も二十前後の威風凛々として反て
 猛々たる矢を三歳の小児もどく怒るたの益世の勇まも憚るべし面目を

浅黒きの身長高たりの高りたるの鼻直く唇横る人面の相似るも並
 ての同くたるがふあは是仁義八行の玉と連れ好男子が勝りたるの
 とは前面の坐席の錦綉の間道の翠簾と透間も掛早て這裏面を
 姫上達の着坐を其処の銀燭も翠簾の間洩灯花の散香がれて風
 さる春の暎昏の似る色濃りける丹楓の山の秋の斜日の刺さる誠や
 義成主の八個の伶愛の第一の君と静峯姫と喚做して十九歳も第一の君
 城之戸姫第三の君の鄙木姫と同庚の十八の君第四の君竹野姫と第五の君濱路
 姫も十七八歳第六の君菜姫第七の君小波姫の共二八の君第八の君身姫の
 年三五の君の既生情漏て身長も大人備の女兄君達の内似る
 及て第一の君の形貌小さく瘦肉の目那堂中の舞ひとの趙飛燕の似る
 けん孰も稀なる美人の肌膚の雪と塊ね玉を延するも異なるも翠雲の長

やうき立裳裾に至るべし花をへいし月をふ十のころ三日影を
 ひへん心も皆思ふも走筆縫刺の技はらに官絃の游も疎のむ
 生平の宇通保源氏物語を枕の友として歌をよみ讀るもゆり或は物の本を好
 るて文の女のつゝ綴りて人の見せぬ世の聞えざるうづう間話題休徳而
 八個の姫上達へ頭ゆへ玉を鏤る花の叙児を戴り身中縫は沼相治色々の衣を
 被飾りて儲の席小就る給事の女房等も今宵を晴と打扮て各々侍坐
 たり是れわまの錦の上の花を添ふる温柔妖艶の妙も皆深簾の内をれば大士
 等の目も見えざるを憾とぞ一姑且て給事の老女出て来て二家老と大士合宵の
 壽祝を舒まごし却辰相清澄の事の進退を相譚ふより其言葉退げば翠
 簾の内を氣色して絳み深做する八條の太緒と出されけり辰相夙く是を見て
 立て其緒の端を合て徐み曳く長き二丈二尺許あり既小曳出し畢りて八

條を揃て席上の閣げ八大士等ころゆて俱小徐の進よりてその其緒の端を
 合て各をよみ是と結び引けり脚を敵わり込引たり引たりと竟み放ちる
 ちと各急み繰り寄され果して那方の緒の端の各其名簿を附らまはし
 辰相則膝を我りて一箇々々其牌を合拵けり得と見て聲高やうは是を讀
 内外齊一うち听く第一靜峯姫上大江親兵衛仁第二城之戸姫上六川
 長挾莊久義任第三鄙木姫上六村大宇禮儀第四竹野姫上大山道節帶
 忠與第五濱路姫上大塚信濃成孝第六栗姫上大飼現八兵衛信道第七
 小波姫上大夜下野亂智第八弟姫上大田豊後悌順各是を引ぬる天
 縁の致も所御配偶皆定りぬ千秋々々萬々春と祝されば翠簾の内も女房
 等の祝聲も萬福々々を應へける當下荒川清澄へ準備の料紙硯をもて
 件の男女十六人の名字二通を寫し程給事の老女又出て来て両家老八大士



八代傳七郎卷五十一

七

山



八代傳七郎卷五十一

山



八代傳九郎卷五十一

八

文政五年



其二
 八小姐天
 縁良對を
 泊ねる処

八代傳九郎卷五十一

文政五年

事の秋びと評るを清澄則正配の一通と照ふと老女の遍與に受戴して退る
つ。俟而八丈士の當帝と退きて俱の宿所の罷るるべし又辰相清澄の馳て
後堂へ赴て義成主の見参して姫上達の御配偶の固様々々と安え上て
寫ま一と通と呈聞まねるべし義成主含み笑ふつらくと是を見て六郎兵庫の
心も屬む我女兒毎の皆嫌ひ前より定まるる似たり故何と云ふ皆是
名詮自性の譬の靜峯の仁の妻と云ふ語の所云仁の靜之仁者山を樂む
のつ小庶然ども靜峯の十九歳の仁の九歳の姉之何ぞ這年の長とて
那年の殊小方とるの合せや亦後知るよりわらん且城之戸が義任の
於るや古語の義と守ると城の如くといふ由り又鄙木が礼儀の於る其故
妻の離衣と文字と異なるを唱へ似たり且鄙の大村の村の對まし又竹野が
忠與の於る忠の苦節の顯る即ち道節の即ち即竹の野の大山の山の對まし

又濱路へ甲斐あり一時成孝の補助とて且道節の那窮厄を極れり又
成孝が故の結髪の少女の名も濱路と云ふは開の苦節の身を殺して今又その
濱路ありは再生のありと他代るとやのふぐらん又粟が信道の歸やまも
由り道の信を倣ま者へ粟の粟の据され道の惑ふべし又小波が亂智の歸や
まも亦語の所云智の動く智者の水を樂むとあり水の動く時波をさる
る波へ則ち水の皮と云ふと其字水の從ひ皮の從ふ智も亦動くがれ用る所
る是智者の水を樂む所以欣又弟が悽順の歸や悽順則ち兄の仕るの道り且
悽順へ仁の外伯父のれども反て悽王と云ふ其八行の由時仁義の弟もさるを
ゆきまの故の弟姫とて妻とま皆是名詮暗合のり是の不測のりまやと其
理を推て解たる辰相清澄感服して隱微發揮の御妙解を放筆して解語仕りぬ
現天縁の動なき自然の妙契を知る足まると稱て敬祝まらうと云ふ義成又

課るやう配偶既定ぬ風納采の儀を行ふべし然とも大士等其城の
 徒らね是等の事も不自由な六郎兵庫相次いで東西比皆質素小救止をよ
 と遺るくあちをぬま存る辰相清澄兼りて馳ぞ退り出かける然辰相清澄へ
 次の日大士等が出仕の折義成主の解のひる各詮暗合の妙契と納米進上まよと
 の仰を具の告知まれに大か感する開が中の周智かりやう各義暗合のひも
 昨宵臣等も宿所へ還りて不圖思ひのうらも然も深くの考果さ寔の
 館の御宏也感心の外に其一二を説示せ成孝も俱のひやう故の濱路の
 りのちも只結髪のもろふ苦節を守りて命を惜まざり人左母二郎の殺まて
 烈女の名をの送本へ我他へ女子を娶らざりと思ひし忍るが姫上も亦
 他と同名めて且甲斐峯の奇事あり竟の我成孝と誓婢自然小定りへ造化の
 小兒の配劑欵一大奇事のひたといへ禮儀も俱のひやう臣等も離衣が

腹を劈た玉を非虫て親の鯉言る妖怪と仆を思ひ復取るべくもあら
 さう離衣鄙木の稱呼似うる實の館の御諭めて断一那緒を續る者欣
 とのひて義任推禁りて卒先館の拜見して君恩を謝しをるべしとのう大か
 諾るひて辰相清澄共侶の義成主の身邊へ参りて許嫁の恩偶を拜し
 まる義成主尖しげの各天縁既の熟して我女兒毎對をいられ飲ひ是の
 優まるとあり就て嚮ものひけらり真利公柳丸の女兄甚羅媛の誓婢の
 我意ふの政木大か妻せるべ支親家門相應りうらんよの美へ明春下野長袂
 等媒灼して宜く相計ひさせようとい仰大士等皆欵びて孝嗣も亦新参みて
 勤功久くうらる今又佳る恩命を他兼りいつと感悦仕らるこの辰相
 清澄の俱の祝頌あうりける姑且して道節がのやう四境りて理りて君恩
 らいのみ只廳南の一條のりも其後の御制度を兼りらぞ那美へ什麼と問

稟せ。義成主點頭。然。其。事。の。六。郎。兵。庫。を。よ。く。知。り。先。始。し。う。
告。ま。り。と。仰。み。辰。相。清。澄。の。阿。と。応。の。忠。與。を。向。ひ。て。各。位。も。知。如。く。降。人。武。田。
左。京。亮。信。隆。の。去。歲。の。十。二。月。初。旬。水。路。の。寄。隊。の。從。ふ。て。裏。伐。ま。す。と。請。京。の。
保。質。一。條。丹。四。郎。信。有。と。ま。り。せ。て。舊。罪。赦。免。を。願。ひ。し。館。其。美。を。御。許。容。
ゆ。り。て。當。日。戰。功。行。ま。り。則。他。が。願。ひ。の。隨。意。其。舊。領。を。廳。南。の。城。地。を。返。り。ゆ。
へ。と。照。文。一。通。を。合。せ。る。ひ。さ。這。美。の。大。阪。大。山。の。奉。行。ひ。し。所。を。い。ひ。て。も。あ。ら。
ひ。か。ら。端。俣。の。且。如。の。と。い。ふ。介。る。信。隆。の。十。二。月。八。日。の。開。戰。の。定。正。主。の。從。ひ。か。ら。
洲。崎。へ。向。つ。て。徑。の。艦。を。横。行。て。上。總。の。浦。邊。の。推。渡。し。梢。地。の。廳。南。の。城。の。
造。り。の。城。の。頭。人。江。田。九。郎。宗。盈。の。告。り。や。う。咱。等。の。里。見。殿。と。約。束。の。ゆ。え。則。
寄。隊。を。欺。き。離。れ。て。目。今。歸。着。致。し。う。當。所。の。里。見。殿。の。返。り。の。ひ。け。り。我。舊。
城。で。い。へ。速。の。開。渡。し。い。へ。と。挑。ま。し。を。宗。盈。所。を。然。と。い。ふ。館。の。御。照。書。の。も。未。

當。所。へ。御。下。知。り。た。ひ。か。ら。當。城。と。遞。與。さ。ん。や。其。美。を。よ。く。知。り。先。始。し。う。
俣。の。へ。の。と。い。ふ。信。隆。の。御。照。書。の。上。の。又。今。さ。ら。何。も。俣。人。疑。い。の。稻。村。へ。
夙。く。使。と。走。ら。し。め。今。速。の。遞。與。さ。ん。の。咱。の。我。二。の。城。の。ち。入。て。ん。と。父。も。果。て。二。
二。十。一。の。隊。兵。三。百。四。五。十。名。を。薦。り。て。二。の。城。へ。稠。入。り。し。那。里。を。守。る。老。兵。一。人。も。漏。
さ。し。追。出。し。て。門。戸。を。閉。て。執。合。ね。い。江。田。宗。盈。怒。り。の。堪。え。ず。急。に。士。卒。を。推。薦。り。て。
數。の。果。さん。と。教。團。と。と。第。二。の。頭。人。畑。夏。作。速。く。諫。め。て。い。ふ。や。う。信。隆。傍。若。
無。人。の。れ。も。館。の。御。書。を。照。据。の。あ。ら。ぬ。其。美。を。訴。ま。り。し。と。同。士。數。を。せ。い。後。
悔。わ。ら。ん。ま。の。美。を。思。ひ。の。ゆ。え。と。い。ふ。と。宗。盈。爭。難。て。則。急。遞。脚。の。使。者。を。と。り。
信。隆。の。非。理。非。法。を。館。の。訴。奉。り。て。御。旨。を。請。け。り。館。の。坂。馬。さ。の。ひ。か。ら。其。使。
者。の。御。書。や。う。現。の。武。田。信。隆。の。智。計。の。似。し。れ。も。其。性。奸。慳。み。て。獨。立。ま。
欲。ま。り。と。い。ふ。當。城。の。來。て。恩。を。謝。せ。り。徑。の。舊。城。の。ち。入。て。又。歸。り。宗。盈。を。代。ら。

ましく他が理不盡勿論れども。今急小敷の果さる人の不仁の做ふ似たり。非如
舊城廐南の二の丸の籠るも。僅の三四百の隊兵とて何事ぞ做のる。應
南の民他が舊恩を徳とせ。義成が民たうま。欲まの信隆竟身と措難て。
悔て罪を謝する日ありん他が敗を取折まをうち捨て置べしと則下知状を宗盈
等に賜りて其使者と返しゆひけり。是より後の信隆の二の城の在る所の戦粟を
合用ひて己が自次せざるのまれば。江田宗盈憤念の堪む。屢使をまわす。
敷の果さんとて請稟あし。館のあり許のらむ。只うち捨て置べしと殊る。御
下知るは故のま。和殿等々の御渡されも保質一條丹四郎も。開が儘龍田の
閣のものと告る。道節少のま。亦館の御仁知らる。信隆が奸詐の裏
奥館を欺まらうて。反て寄隊を裏伐せ。推て廐南の赴死を舊地を横領せ
まく欲ま。其罪のゆ。輕くも。そま。誅伐做されむ。猶叛く者ヨクと。

議さる。亂智推禁めて大山開の通へ。信隆奸詐とのり。他の一箇の豪傑の
道理を知ぬ者あり。他が出没次ぬ。廐南の入り。稟解より。のり。か
然の館の御計の寛仁大度の優愛とわ。の詞のま。託む。一箇の青侍廐の檐廊へ
來て告る。廐南の江田九郎宗盈が武田信隆の事の就て稟上。のり。とて
第三の頭人畑夏作が信隆を將て参上。のり。とて。義成主うち。世の常言噂を
まれば。影刺とのり。先夏作を召べし。仰の青侍とら。速く退り
あ。八士両家老の席を正し。候程の畑夏作通豊の幼装の儘。七青侍の
引きて來て。義成主の拜見を登時。義成主の大阪大山二天とて。先其故を問せ
る。畑夏作則稟ま。武田信隆が非理非法の為。体の裏の訴奉り。如
介る。信隆が隊兵の甲斐の武田の士卒。れ。他が威勢。弱り。戦粟ま。
竭るを見て。久く留んを欲せ。日毎の十人二十人病の假托け。

甲斐へつゝ去りて残る信隆が従来する隊の兵五六十名あり信隆は
 あり憂ひていそよの地の莊客の舊恩を説示して我軍役の充んと思ひて
 有一日小鷹鷹の假托けて士卒十名許を將て情地の城外へ立出て地方の村長
 故老等を幾名も召よせ且つやう若們的我舊領の民も今も我に従つて
 二季の調貢のさと壯なる兵毎に我を資て第二の城へ看籠るべしといひて村長
 等々兼引ぎ詞ひとく辭ふやう當所の里見殿の御領ありしより御仁政を
 こそ御恩の下ひの御身に従へとの御下知もなほの然る僻事を仕らん思ひ
 かけのりつとて立去まじ欲しを信隆急の喚禁して論じし所され竟に怒の
 の堪むと七刀を掲りと抜くも見せむ一人を破と斫付其大家驚き且怒て狼藉
 者あり極へくと叫ぶも四下近に莊客の兵も連加を推して百十數名走り
 來り信隆主僕を捕縛て面も振せぬ敷い悩む信隆も伴當も刀をりて受

流し打拂の戦ども又勢も物とせむ利加勢の莊客の跡が上の聚合
 來て只直打の敷い信隆の伴當の一箇も送み敷い信隆も防難
 既の必死と見え折る城の頭人江田宗盈馬を蜚り馳出て喚つる騎
 騎入莊客を禁る程の宗盈の隊の兵も走り來て俱に信隆を
 救ひけり當下江田宗盈の村長故老等を召よせ事を事の起原を尋ねる信
 隆が理不盡る然るを罪を莊客を矢庭の敷い故の壯校児毎
 堪難てよの趣舎のい言分明りて宗盈の村長等が訟め及むして
 乃且も舊領主と聞諱め及びしを叱りて療負を勅らるる所られ
 莊客の窮所のわね死に至らむ又信隆の伴當の撲傷されば折れ
 脚を折るして侍の是も命の恙なけむ宗盈急の醫師を招きて甲乙
 俱に療治せしむる五六日を經て安らるべしとの是より莊客の金倉見と

俱に還し遣り信隆主僕を儘に城内に扶入る信隆先非を後悔して宗
盈の勸解るやう咱々洲崎の陣の参らざりて當城の入りたる西岐武士の
是之故何と定正主の隊を離れて裏伐せざるは是義之倘欺きて裏伐を其開又
悪の悪する者で兇賊の寺に於て然り裏伐をせざれども當家の御方参り上の
功のいふまじかき又里見殿の請京まで當城の入りたる里見の賜り照書あり且
此地の我父祖三世の舊領され民皆舊恩を忘るるや必や信隆に従ふらん
思ひし思ひまを莊客の里見殿の善政を慕ふて信隆を徳とせむ及て事を惹
出して這辱めぬひける人を知りて信隆が不覚の後悔臍を噬るの
いふを稲村へ推参して是等の罪を謝せしめ欲もその義を執達せしめと唧言
かまへし陪話則神文の誓書一通をさるせ赤心を示すに宗盈も
やく受容れて臣畑道豊の其免を課て士卒百五十名を俱に信隆を送りし

參着仕りぬと言詳の告稟其義成是をちめて信隆の誓書を道節が讀
むの歸降の文分明之義成憶を含笑然りて然りて後驕臣を懲
敗と取て今の眞實の歸伏せり然りて賞罰明らざるに後の驕臣を懲
かたり信隆を印東小六荒川太郎一郎の預けてん城内の一室に五十日龍
措へ候ても怨ひもあらぬに我對面して舊地を返さん下野と道節の義を
小六太郎一郎の傳へて江田宗盈の下知状を賜り畑夏作を勞ひて
鷹南へ還しひける介程の信隆の明相清英曾りて龍居五十日及ぶりの
聊も怨言もく只恩免を請ふとせえし義成主憐て這年の冬十月の
武田信隆を召出して正廳にて對面あり八犬士四家老并小政木大全印東小六
荒川太郎一郎等も傍りける登時義成主仰出さるるや武田信隆機変を
も獨立の罪ありといふも竟らみづから新しき眞實歸降せぬる上舊

罪を赦免して舊領廳南の城地を返し與ふ今より機変を約し下ましく只善
政を旨とせし縦機変をとりて忒の城に入るとも民従む誰と俱守らざる
美とよしく思ふべしと叮寧に誠り多し信隆の頭を敲りて兼服せむといふ
み義成又仰さるやう信隆士卒減少して五六十名の過ぎとて當城の士卒
假して大阪下野の送らせん風く還任致まじとて身の暇を賜りけり然る大阪
亂智の士卒三四百名をねて信隆を送りて廳南へ赴折義成主の保質一條
丹四郎信有をも信隆に従つて返りしべし他は里見の徳を慕はせ仕ま
欲しを願ひしうが儘龍田の城に在らせし野崎照文の隊を諫られけり信而大阪
亂智の武田信隆の相俱して廳南の城に來り城の頭人江田宗盈畑道豊との
君命を傳へ示して城渡のりを課さるし他等も其あるはの事立地を整
ひて信隆と交代も又宗盈道豊の這回の相計宜しけりとて義成下知して

他等も大江親兵衛が返りしあり上總國館山の城の頭人小做りしこの這
美も亂智の傳達をてし宗盈道豊の宅眷并し士卒四五百名をねて徑に
館山の赴りて那里の番士と交代して生涯其城を守りけり又大阪亂智の
廳南の村長莊客等も義成主の下知を傳て城主信隆と和睦せしめ且隊
兵二百名を留りて稻村へ入り去りぬ然る信隆の宅眷殘兵の遠近小潛居る
者主の還任を傳ゆて皆欲ひて入り來りければ稍大勢の隨小里見の士卒
二百名を武田の老黨と相添て稻村を返りける是より後信隆より其城
地を理りて久しく廳南を有ちけり按むる小房總志料上總の部小里見義成
時廳南の城主小武田信栄といふ者あり甲斐の武田の庶流にあの信栄の
里見の從ひも獨立ことりし意の事件の信栄へ信隆より二三世の孫多るべし但
信栄の事のみ詳らざるも作者前後の借用を看官是等の用意を知るべし

狐龍化石を貽して大蟬脱ま
第八十勝回上
行壁を反して八行十世傳ふ

復説武田信隆が廳南の城へ還任して本領安堵せしむるに千代九圖書助
豊俊も戦功よくて罪を許され其舊領も上總國榎本の城へ還任せしむる
宅眷老黨父のさくら安房上總小縣居る千代九の残兵等早く是を安知りて
且敬馬さ且飲ひ勇まて日るるを聚ひ來りけり城内士卒小匿るるを家門繁昌
まらけり。倭而次の年の春二月義成主の八箇の小姫子八太士は遣嫁のありて媒
妣見東辰相荒川清澄這他老黨有司奉りて男女の伴當を點配し納采調
度送りの式を當時よりむと書し詳めて足利家の時俗の禮を粗知る足
まの又のへくもあつた時太士等の新城のいまも落成せしむるわれども居宅の
都て造り出せし各其所を以て新婦を迎へける洞房花燭の歡會の賢も不

肖も異るるをさるべし。開が中み大江親兵衛の。當晩靜峯姫と圍衣合番の
あつた。臥尊を俱れせど情地は是れ告げていり。見らるる如く我身の大人備て心
術こそ擇かぬ年尚十五の足らざる風く色情を動まらるる。倘今男女の
交を做さば曩の八百比丘尼狸の妖術を立し浮名も亦さるる人の疑ひを遣ま
へ。まの故の我年十七に至るまで峯上隔つる山鶏の雌雄の宿の候まらるるまの美を
饒し多うと又他事もく解示を靜峯姫うち受て宜ふ趣理りみけり関
睚ハ樂て淫せむと云ふた夫婦の一世の恩愛もみらるる添臥せしむる左の
右の御身の隨意行ひ多しと志の是より後六稔あまら枕を並て睡るま
るけれど然りと疎らるる生平は良人を敬ひて反て意中の親あり。倭而親
兵衛が年十七といひ春の比より夫婦始めて衾を累て比目連理の枕を並ぶる
遊仙窟中の夢を結びしを人後み安知りて感嘆せむるはるる。あはれ是後の

話之然い大士なきが誓姻の後政木大全孝嗣も亦君命のよりて大阪大川媒妁
ゆて真利谷柳丸の女兄葛羅媛と誓姻の歎ひあり上總なる推津の城より姪女
同國勇瀆郡大田木の城へ迎へ入れて皆老同穴の契浅らふと又照文の女兒
山鳩の年十三の比より吾孀前の給事とありて去の時十八歳にて身の暇を多うて養
嗣紀二六の十二郎照章の妻せりつ皆是君恩の厚なるれ各其歎ひ知るべし介程
政木孝嗣の既大田木の城主とれどもいさ房總の地理を知らねばの年の夏義成
主の願ひ稟て國中を徧歴を素より微躬るれば伴當なる最畧とて士卒六
七名の過ぎるべし身も亦騎馬をりぎと歩よりゆくと便利を先大田木根小
屋の城より遠らぬ身瀆天羽の二郡より創んと普善村硯の里雜色村を
過る程の伴當の中御導の老兵ありて孝嗣の生るやう方僅過せりひ普善村
硯の里に在昔上總介廣常の住一所也館の迹あり然ると今の土人も知る者稀之又

あより程遠らぬ館山の城の四下ハ昔者廣常の山莊ありければ今も館山の名賤り
だの然い安房の館山と同じく是もへ見ぬ世の事なれば正照据もいふ今現
硯不隣する乙塔村の那神童増松和子の實父阿弥七叟の宿所ありそれより
猶近らる這雜色村の内中字古江ふ地方の醫王山金光寺と喚做する一座の
梵刹ありあり台家本尊大日如來也這金光寺の廣常の子息の墳墓
あり因て山號と古塚山とも喚做しう這寺内なる山脚を穿ちて洞の如くする所
故なる無銘の五輪石塔波の土俗相傳て上總介廣常の墓なりとのう瘡疾を
患る者其石塔のまは鮮を削合て水の浸して飲時即切あり瘡さる者ありとあり
とぞ折々其苦を採る者絶えざるといふを孝嗣も承りて上總介廣常の鎌倉創業
切臣のことも功の誇りて忌憚らざる屢嫌忌を犯せし頼朝卿の疑れて罪を
誅せらるるのき開の壽永二年の古史を載て東鑑の詳之先や我も立ちて其

石塔波を見たりと云つ歩多ゆるり程金光寺の門前投て來りける程の天
猛可の結陰りと疾電光勁風の雨之蠅と降沃ぎ乾坤忽地野干玉の鳥夜の
まのぬる不どいもあつぎ數道の金光四下と射て天より檜と墜る物の其音大
地も顔る如く人堪ぐもわらざれば孝嗣主僕へ吐嗟とむり赴りて老る
松の下自身を瀝し忙然と聚立てわける程の姑且と雨歇天霽て日光隈
みる刺を隨ふ孝嗣主僕へ晴を定めて目今天より墜る何ものらんを俱小
見るふ正は是最大さる石のせりける壁に其形状宛蟠る龍の像く頭々
虬の似て虬のありを孤の似る様を尾とおぼしけ者九つめて縦横約三尺
計紛ふぐもゆね白石るれば伴當訝る片が中の孝嗣へつらくと見り吐嗟の
思ふやう原來這孤龍の化石の政木狐が約束違つて他へ既ぬ數盡終をみ
示せらん奇々々とさるのみ只顧感嘆まなる折々這寺の門内より沙弥

道人と共侶の立出る三個の武士あり一個は年四十許兩個は二十前後を就骨
相鄙るる一對するね各各身軀甚の野袴の裾裂の單外套を被て大小の
両刀を帶るが伴當殿兵とあし者十四五名を従ふる約莫の僧俗へ
墜る化石と孝嗣主僕の立在るを見出して胆を洩り指さして那人達の
震れさせよと堪これ最奇之と云間一個の武士は孝嗣を必を見て開い
政木主るる武田信隆めていといまた孝嗣も急み其方を見つると然
いぬる比縮村の初て對面致る武田主恙るや廳南より路近く當寺へ
何等の所用ありとみづら諸多ひると問れて信隆然に咱等の前月瘧疾
中醫療即効ありと俗説に従て當寺へ使を遣り上總介廣常の五輪
石塔波の苔を採せを腹用志ひ疾疾病立地の瘡り果る感謝の堪
悄々地を賽と云る和殿へ又何等の所用ありて這頭を過りひぬる折々今の

暴雨天爰恐るべし這大石の樸と云ふは高運の致す所神明佛陀の加
 護らん寔の賀をせりと祝其孝嗣礼を返して原來廣常の墓石の苔へ効
 驗虚談のめりけり。洒家の新參のいふ二總の地理をかね館願ひ存りて
 隈多く履歴まぬる隨ふ當寺の廣常の五輪塔のりて知らず見ると思ひて
 來りけり。暴雨天の路を去るに刺化石の天降るの逢ぬ在昔唐山姫周の時
 宋の石墜る者云々と春秋左傳の見えたり或は又星墜る石の多しとの者めれ
 ども是のそれの同く見ぬ狐龍の化石とのを信隆訝りと狐龍の抑
 何なる物ぞと問は孝嗣然りと白狐既の千歳を歴て其功德多し時ハ化
 して龍の物ゆゑ是を狐龍と喚做しうあや傳傳の事なり去々歳の夏
 前面の岡にて我必死を救ひたる政木狐即是之這政木狐の事ハも説ま
 するふ言及け且び亟め盡しごとくたとの間ハ兩個の武士も共侶の找ま

孝嗣ふうち向ひてあや政木主初て拜面仕る。俾職等ハ館山の城の頭人江田
 郎宗盈畑夏作通豊の之近曾館の仰ふよりて麻南より稜轉して館山の
 在番仕りの心を這頭する。神社佛閣の古記録什物を展檢の為ハ今日
 當寺へ來りけり。料らぎ武田主の來會せり。今又和殿の對面の款ハ只
 是のまゝ。耳新あき狐龍の化石を見聞幸ひヨタリたとのハ孝嗣礼を
 返して豫て安知る。江田畑両生思ひかけりた對面ハよ折々ふいふ却這
 化石の事ハ就て當寺の住持の面談して。請ましくハ思ふよりわりの
 詞を添ひねと憑へ宗盈異美もみく開けたり。誘ひ又客殿で且
 猶餘談を兼らん。武田主も共侶ゆと誘引立れば畑通豊の先ハ立案
 内を然ハ政木孝嗣ハ信隆宗盈と共侶ハ自他の伴當を相從へて引きて
 寺内へ入る程ハ沙弥道人の側聞して疾方丈へ告んと走りて先へ退りけり。



迹の近所の莊客們天より墜るる石を見んと走り聚る者堵の如く又寺よりも
年少僧等の立出て觀も見るべし余程の政木孝嗣の武田信隆江田宗盈
畑通豊等も宗内をせし先廣常の墓石を見るも果して山脚の沙洞の
内在り現小甚小の無銘の五輪堂も半分亡て高さ二尺小足らざり只
青苔の裏まをとも見えざる孝嗣の懽然と一霎時謁して且りや
在昔上總人廣常の當國の人として二萬騎の大將なりたれども身誅せ
らる國亡びて子孫断絶あつるより今に至りて觀念者も只羊体の五輪堂の
抑亦悲しむる世の相將の威權壯るとはる車馬門前小満さる日るく倘
其職を去るとは殿庭の雀羅を張べ榮枯得失の理り誰か竟免るべ
との信隆宗盈通豊皆共侶の嗟嘆し打連立て委關の赴けり役僧
早く出迎へて躡て客殿の請待を孝嗣則正客なり宗盈信隆は左右打

通豊の下坐をけりける候而看茶の礼畢りて住持出て對面を當下江田
宗盈の住持の孝嗣を引合して化石の事と説示せり孝嗣則住持の向ひて方
僅當寺の門前天降り一狐龍の化石の喙等と由縁ある白狐の終焉を
示せり其故の箇様々と政木狐の事の顛末他の孝嗣の母の受ける舊
恩を報ん為め去々歳の夏前面の岡の妖術せり孝嗣の冤屈の死刑を
救ひし當日他の功課満て狐龍の變て不忍の池より升天なる折後三輪を
歴るる當國にて其終を見りよふんとひてまて説示して又のやう
這奇事の我のさるる當時大江親兵衛も目撃する所を狐龍の先言
果して通の一大奇事のいひやるとの詳多ければ主客齊一駭嘆して異聞
ありと稱けり當下孝嗣又のやう右に就て有等情願ありて件の狐龍の
化石を當寺内の埋葬して塚を築まじ欲を雜費の大田木へ歸城の後必調進

致きん。とりの住持のちゆて其美あらえい。當寺の上總久廣常の五輪石塔婆あり。在昔近衛院天皇の御時、妖狐變じて宮嬪玉藻前の化て帝を悩ませり。詔して天文博士加茂泰親の禳せり。妖狐竟勝せり。走りて下野多奈須野に到て躲れり。於是三浦久美明上總久廣常千葉常胤等、詔して奈須野に到て狐を獵せし。件妖狐、廣常が射箭、竟斃されて化して一箇の毒石の作りぬ。世に殺生石是之彼と此の異なり。其政木狐とやら。の化して石の作りぬ。當寺の埋葬致る。是廣常の忌む所。那靈安のまをのべら。ん。這美、怎麼と談ぶる。孝嗣の安む人を長老の言錯る。那九尾の妖狐玉藻前の小説の近曾明船の齋し。封神演義の作りぬ。裨官者流の新作の素より。のべた事ら。然と昨今世に見れる。下學集の是を載。又能樂の謡曲。殺生石と題目して作設る。ひれい奇の走る

今の世俗のひもて傳へて故事と思ふ。那奈須野の毒石の砒霜礬石の類。多を附會しての。ん。非如其事。のりとも。玉藻如きの邪物。至る所人の。尊も政木狐の靈狐の勤所。世の切の廣常。這理を知らざらんや。那人尙靈ありとも。決して忌嫌ふべら。ども長老。安るべし。と解して住持の頭を撫て。拙僧。輕之。失言せり。い。海容のれ。と勸解れ。宗盈。執合。政木主説。ひ。妙之。長老も亦出家の本性格を飾らぬ。人の及む所。めて共。感心の外。に。那化石を牽入。埋る。その夫役。等。の。年職。都て。衆。莊。容。の。課。事。計。ひ。て。ん。との。住持も孝嗣も相歡ひ。是を謝して。要談。既。果。住持の。辭。と。退り。り。登時。又。役僧の。沙弥。の。課。茶を薦。も。菓子。を薦。る。程。の。信。隆。の。孝嗣。の。戈。を。感。じて。且。の。や。大。全。主。の。妙。年。の。れ。も。玉。藻。狐。の。事。の。論。辨。老。儒。も。及。ぶ。べ。ら。む。就。て。學。問。せ。ま。か。た。の。り。の。狐。龍。の。事。の。何。の。書。の。載。る。せ。

知らざれば必出所ありんば欲しういと問ひ孝嗣然りと云狐龍の事ハ畏れ
大江親兵衛が既に見る所ゆつて奇事記に出たりといひぬれ今按ずるハ淵鑑
類函狐部ハ載せんと空言と云ふと思ひ疑ハ解ていことハ信隆點頭て
現ハ書ハ見る者ハ今博識の教ハ誰ハ狐龍の出所と知らん歟ハ是ハ
優者ハ然とも狐龍升天の事ハ就テ猶疑ハ思ふよハ嘗聞義實
老侯少り一時結城落城の日死を免れいハ安房へ渡さんと相模
三浦の海邊ハ船を徴めるハ程ハ白龍俄然と海より起りて天ハ登るを見
ゆハぬれといハ龍ハ鱗虫の君ゆハ其徳セ王者ハ比ヒ源氏ハ素ヨリ金徳
ゆハ色ハ白を貴ブ然ハ義實主安房ハ造リて我程もハ神餘ハ義
義旗を揚テ逆臣山下定色を誅戮セヨリ満呂安西ハ伏誅シテ安房四
郡を併吞シ更ハ上總を討從テ賢君のゆえハ其子義成王又

出藍の譽れ高く遂ハ上總人の從ざるを威服シテ下總羊園を討麻非善政施
まら所ハけハ國民皆克舜の思ハを倣セ其仁義良善の君と思ハ今ハ
諸侯よりこのも侍あるべもあらざ別又ハ大士及和殿の如キ英武賢才の良
臣更ハ且白龍の祥瑞ありと思ハ竟ハ足利氏ハ代リて天下の連師ハ
必里見氏と云ハ然ハ東西南北の一隅編小ハ安房上總を領するハ下
總羊園の外ハ又地を増るハ去歲の冬西官領と戦克テ偶攻捕敵ハ
三四箇城ハ和睦の後ハ返一與へて鄙語ハ濟西も二百方一七切るハ
然ハ祥瑞ハ負まが仁義ハ亦益ハ賢兄必辨ハ争何ぞ
と論ハ孝嗣完命と云ハ笑テ否我思ハ孝嗣ハ白龍の事ハ
亦孝嗣ハ亦傳聞ハ那時龍田の老館ハ龍の服と見ハ龍
頭と見ハ因テ思ハ老侯御父子ハ仁義賢明の君と見ハ徳と

嘉瑞のあつたを然るに順逆邪正差のことも魏も亦蜀漢の後若
 僅に一稔竟の司馬氏の算奪せしめて亦四十餘年の國既の
 けり是の由てまを觀れば成敗として人と論する者の天命を知らざる又
 徳を脩むと祥瑞を負ふてみぐる元世の胡慮ゆるん最憚りの
 老館の見ゆらる那白龍の祥瑞も亦當館の御善政も城を屠り
 地を畧して我封内を廣くをた為の民の父母する心を國安らむと
 思召もの人分を知れば貪て飽てま一貪て飽てまければ苗害踵を旋ま
 へんを非如我君房總兩國の守りて地を増ゆるゆも良將の御
 名後世の流芳して御子孫長久らん仁義善政の大益なり仁君賢
 者の慎懋めて常の樂ふ所は只是の何ぞ裨益するとのやあつれども陽春
 白雪の調高う恐らく俚耳の入りかると思ふに什麼と理を推て言詳め

辨ざれば信隆の何とぞうの一霎時感嘆の聲をのぞき又宗盈も通豊も
 膝の杖むと覚ぬも耳を敬け心を澄して正論々々を稱ける姑且て信隆
 急の貌を更めて孝嗣の謝してのやう連愛の和殿の英女今の世の
 ゆびり里見殿の盛徳の八犬士と和殿と王佐の女の賢者を得
 多ひぬると幸なれ我聞所せり山林房八と和殿と犬士の外せし造
 化の小児の脱落然るは是も天命なり惜むべしと譽るを孝嗣
 甚庭の樹粒を見たりて日景の既ぬ斜なる所要の夙く果する鈍や暗
 譚の時を親ぬ退りて路をのぞき信隆諾らひて咱等も潛行する
 虚々とて居へぬむ卒供侶の身と起せ宗盈と通豊へ留難り目
 送る程の役僧も亦出て来て且管待の疎畧を陪話して玄関まで送りける
 俟而武田信隆の伴當等をのぞき立て別れて廳南へかゝり程の孝嗣

亦伴當を従へて這邊の村里を漏れ巡歴せりける。今程武田信隆其
通路思惟る。里見君臣の英武支幹。且政木孝嗣の妙論理辯。感服して
及び「ご」を心小恥て是より機変を衍めたる。生涯里見に従ひける。然るに政木
孝嗣へ又幾の日を累て上總を送る。檢果一々下總へ赴て東西と經
歴る。遂に武藏へ立踰て二親の墓詣せり。りる。既の前回は具されば言肖て
寫さざり。看官前後を照して見る。一。然而政木孝嗣は其の年九月の下幹の
届りて雜色村まで入り來り。馳て金光寺へ立よりて。曩の住持の憑りたる。狐
籠の塚と閱まる。廣常の五輪石塔波を去ると五十歩許の七件の化石を
埋りたる所あり。塚の高さ三尺許。上の固の宰都波を建てる。孝嗣心欽て
寺の女關の呼名ひり。却役僧の謝美を舒て退りて大田木へ歸城する。其後使を
金光寺と館山の城へ遣して住持と江田宗盈の化石埋葬の雜費を還ら

又金光寺の米錢を布施して飲びの心を盡ける。然程の土人等其塚を見て奇
特と稱て訛りて狐塚と喚做す。金光寺の山號ある。古塚山の古の字を易て
狐塚山と唱ける。按ざる。房總志料上總部雜色村の條下云古江の金
光寺の狐塚あり。今其所知を。是の因て金光寺の山號を古塚山といへ
後、狐字を嫌ひて醫王山と號せり。又廣常の石塔波女の苔の癖の瘡疾を
治する。同書載る。借用を看官作者の用意を知る。下問話休
題是年八大士も誓烟の後義成主の請よりて各故御の赴て二親及親
族の墓詣せり。既の前回は寫す。如く。開か。中。大塚信濃。成孝。曩の
義兄弟等が貸する金。其の時送る。還して雜費の次。助めたり。又大山道。即ち
二親と異母の女弟濱路の墓を安房の延命寺の建る。及び成孝又其資助
る。と勘る。濱路の墓。大塚が建。と道節の圓塚山。濱路の横死の折

環會て且其冤家網乾左母二郎を撃果し又濱路の亡骸を火葬せける因縁
支是始めて終るべしと強て施主のりて是をへ上略してあふ
詳き看官前後を併見るべし却説政木孝嗣は大田木歸城の後稻村の城へ
参上りて飯府と告奉る大塚大江大村の三大士も既に出仕てありて孝嗣へ
親兵衛の狐龍化石の事の趣を云々と告知らまふ親兵衛自餘の三大士も
其奇の驚くまで霊物の終つて俱の感のありける然而件の三大士義成
主の政木孝嗣が國中を檢歴去果て謝恩の爲に参上りて告まらるる
義成則孝嗣を召よせ旅中の事を問ふの件に三大士もけりて當下義
成主の孝嗣と近くけりて汝經歷の同我封内の要害の比皆檢去つらん意見
ありて仰る孝嗣額を衝て然る御要害皆堅固めて稟上るるも
但し國府臺の一城の前の暴河の後も岐川を大敵を防ぶ足ら

然れども後の川の淺瀬の其實の沼の裏の臣等那里に在り日件の川
鶴の降て求食を見る敵尙其淺沼を知らず聞戦圍るらん時渡りて城の後
より稠入らば防ぎがごとくやいへとのめをうち大塚大江の愕然と面を注して臣
等も曩の那城内に在りて其曩の屬に然るを大令が見出して稟
上るこそ幸多しけれといふ義成主點頭て好々我らも秘しと推禁
めて其後國府臺の城の頭人真間井秋季繼橋喬梁の書を賜りて
悄地其美を戒めぬ其書の末に遠くともむらへ隠れぬ敵の見えぬら
るの用心をせよとありて秋季喬梁謹兼て城の後小由断せむ成を固く
あつて是より後數世を累て里見義弘の時に至りて北條氏と國府
臺の圍戦の敵那城の後の岐川の鶴の降りて見出して淺瀬を渡りて悟り
て一隊の急め城を攻一隊の悄地の後も淺瀬を渡りて短兵急め

攻入りければ里見の士卒は勝ぞいで竟に落城をうるとの益義弘の武
勇餘のれども文学の疎ければ先祖の遺訓を知らずゆりけん惜むる
むや今國府臺の城迹を見るに那岐川の横八九間もあつた深水を鶴の
脚の立ててもゆるぎ今の如くならん敵の軌く渡らざらん當時は浅
沼の暴河の水を引入て川の如く見せるるべし畊田鋤れて海と古今の
変草疑ふべし故を温て新を知るを学を好むといふたの事ある是後の
話と却説大江親兵衛の日の義成主の政木狐の支の顛末を固様々と
告稟せば又政木孝嗣も狐龍の化石の作りて金光寺の門前を天降りて寺
内の埋りし石を安え上る義成連の笑局に入りて餘談盡せど見えぬ
六の段に猶長かるる且べ這勝回も市下の釐屋で又下回の解分るを聴ねり
南總里見八犬傳第九輯卷之五十一終

